

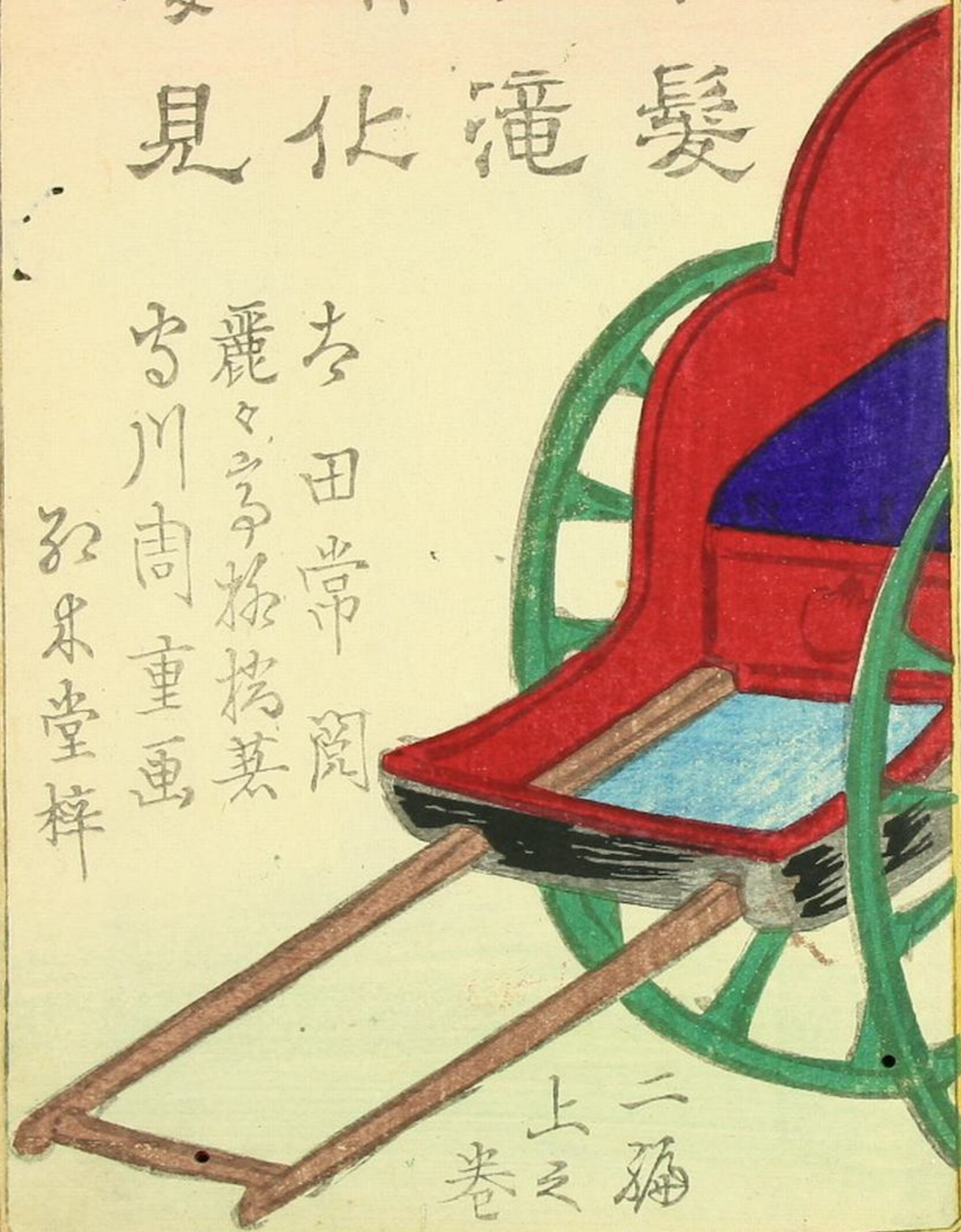
第貳編  
右 田常 関  
教 髮 於 澹  
関 化 の 姿 見  
麗々亭 振 槁 著  
守川 周 重 画

紅木  
堂 梓



A 451  
2

散髮於開姿  
灑仗見



右田常閱  
麗々子孫  
川周重画

弘永堂梓

二編  
上之  
卷



48-8086



二編上



散髮於階

閑坐

安見

太田常閑  
 麗々多柳栲蓐  
 守川周重画



二編中卷

甲州身延山

散髮於瀧開化姿見

古川園東筆

二編下

二編中





千社参りの配札を神や佛の嬉ひもく残裁天窓の  
 女旅信者と偽り開八州周り廻り々甲州路旭の  
 於瀧が賊名を照し明治の譚り悪事ハ追々  
 長吉の傳記をかへて當時の形容落語の社長  
 柳橋が舌耕あゝ御列條の御意よ叶ふを  
 幸ひと餘力の筆は新聞抜書編輯茲は詰  
 局做し勉強社中の教導師よ示し記者の注  
 意と言ふも可あらん

明治十一年五月

大多常叙





古着渡世  
橋本佐助

月可くは  
かこ山  
花の  
三は  
大妻常

農夫  
石井万藏

散髪  
於  
巖

手代 田中長吉



柳田五兵衛の  
細君  
於房

神奈川管轄所

初篇より見たる程は古着屋安兵衛の倅佐助の  
 於滝の色香の幸心と奪われ於滝の脊戸ノホ  
 出と彼の長舌の耳うちあててト度  
 此の場は銀をせし鬼の角於滝の心  
 流りかち悪心持長とて意欲の乃ゆ

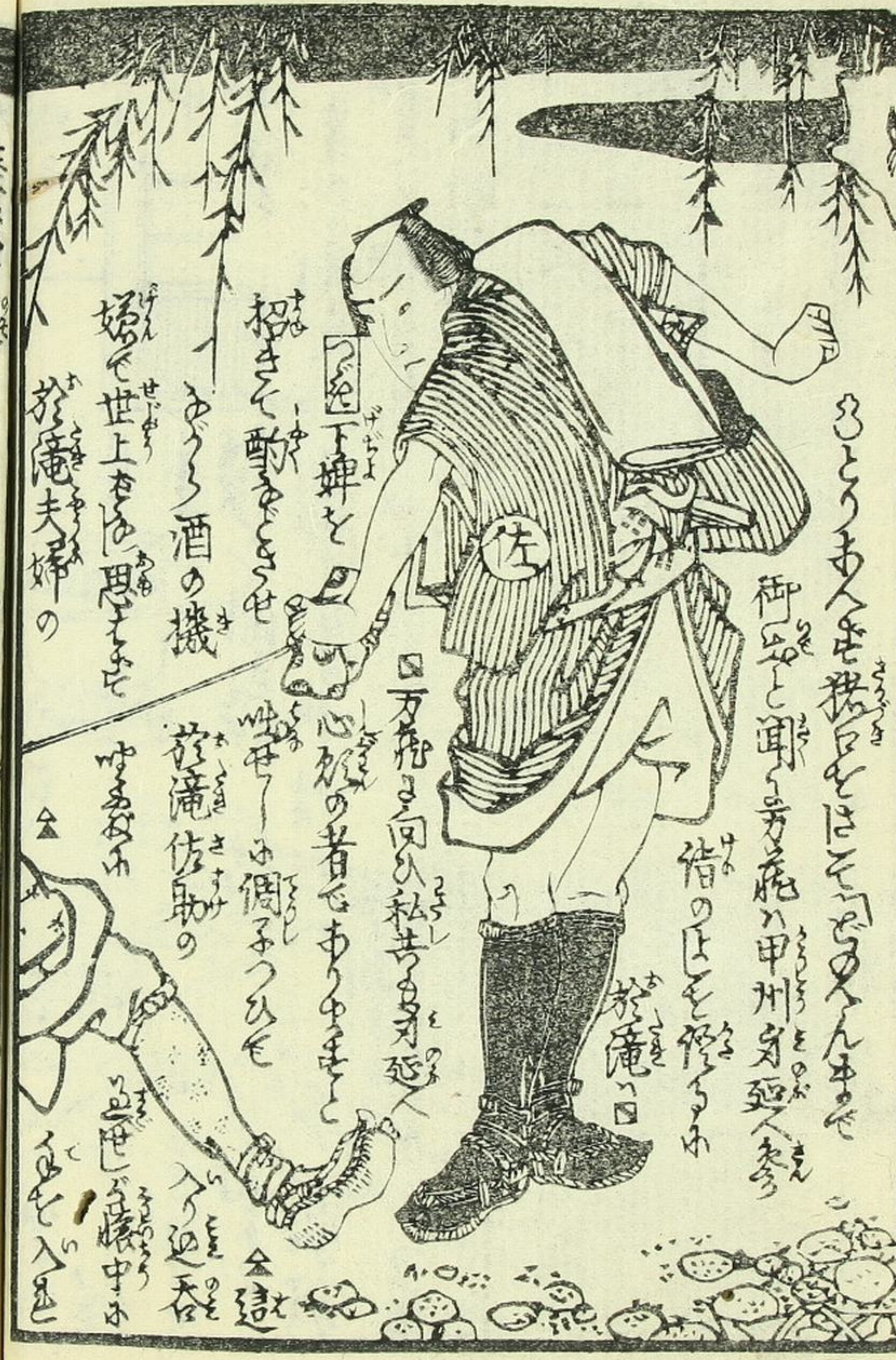


願ふる勉強の毒婦の於滝あまの調子を合せと程よく佐助を  
 言ひつるも其年暮て翌年四月俄は法華の信者となり夫の  
 佐助は暇をとり甲州へ参詣せんと頻りに迫る於滝の底意  
 佐助の情をひらかれて於滝と俱に甲州へ参詣せんと頻りに  
 宿よりし頃頃来る農夫次女の神参り此の人物のつぎ









さういふおんを扱ははるるのん中を  
御と聞の方庵の甲州身延入参  
借のほを修るゆ

於庵

佐

万指の向の私共の才延

心算の者であらうま

おまゝの酒の機

於庵夫婦の

婿で世上を思

於庵夫婦の

座をて選

お若い御二個連

さういふ言葉の

下は於庵

敬



九代目  
三千山余り

萬

童子

貴君御退屈

御乐あれとを理

御楽あれとを理

御楽あれとを理

御楽あれとを理

御楽あれとを理

御楽あれとを理

御楽あれとを理

御楽あれとを理

御楽あれとを理

御楽あれとを理

御楽あれとを理

御楽あれとを理

御楽あれとを理

御楽あれとを理

〇此這入てある幣入をさるゝ宿の下婢を招き其手洗を  
 差出し膏を洗ひあせしむるを於滝の疾くも目をつひ  
 しが万病の心づつるを貨幣と傍りよとせり  
 佐助がさうしたるを血をころけり  
 於滝はさうんとし傍りの  
 生辨本燈を運をよ  
 して傍り(座)幣入を  
 る早く懐中へ押  
 込し暇をつひと  
 我が座をぬき引とりし  
 於滝の物は一物おれ其夜  
 佐助はおむらひ

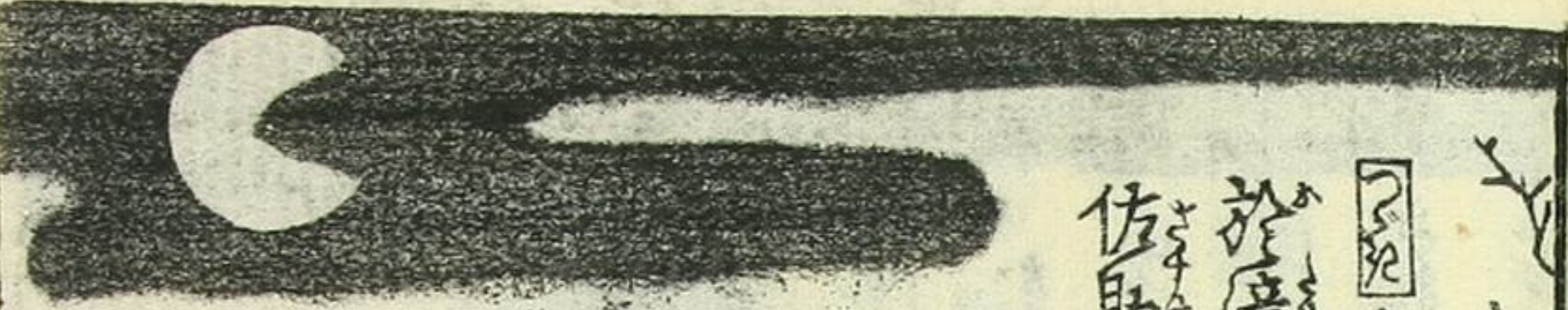


〇道中佐助の伯母  
 道中の車も安  
 伯母が  
 おれい  
 〇何あるとあんと  
 尋ねるに於滝の  
 耳よりを上げし  
 ぎうたの客人の  
 懐中あてし





○急ぎ足す農夫方路の隣り座敷の疾立は目をさやう声をもてそ仕度と調ひ添より急ぐんとせし二個の足先へとりひき疾四五丁も歩行一頃も添より来る農夫の方路二個の聲と扱きてお疾いおものあつ忠信をまどれは於庵の野州のどおんと暗い中の中せぬらとりの方路の貴君方のお立り定めて時間



身延日まて於庵よ言とせて佐助の吃驚後まの誓言葉もあはしが終る於庵の言めたりひその夜に臥して翌日拂曉よ府中給と生ませし日野の河も平水とまじりころの二個の悦び

於庵のこころおる体をあつ佐助の瘦りつみ耳よ口あて仕度とあつ言もて佐助のガクハ惚へ出於庵の素況を見ゆる方路が後よまらう野州の空口人

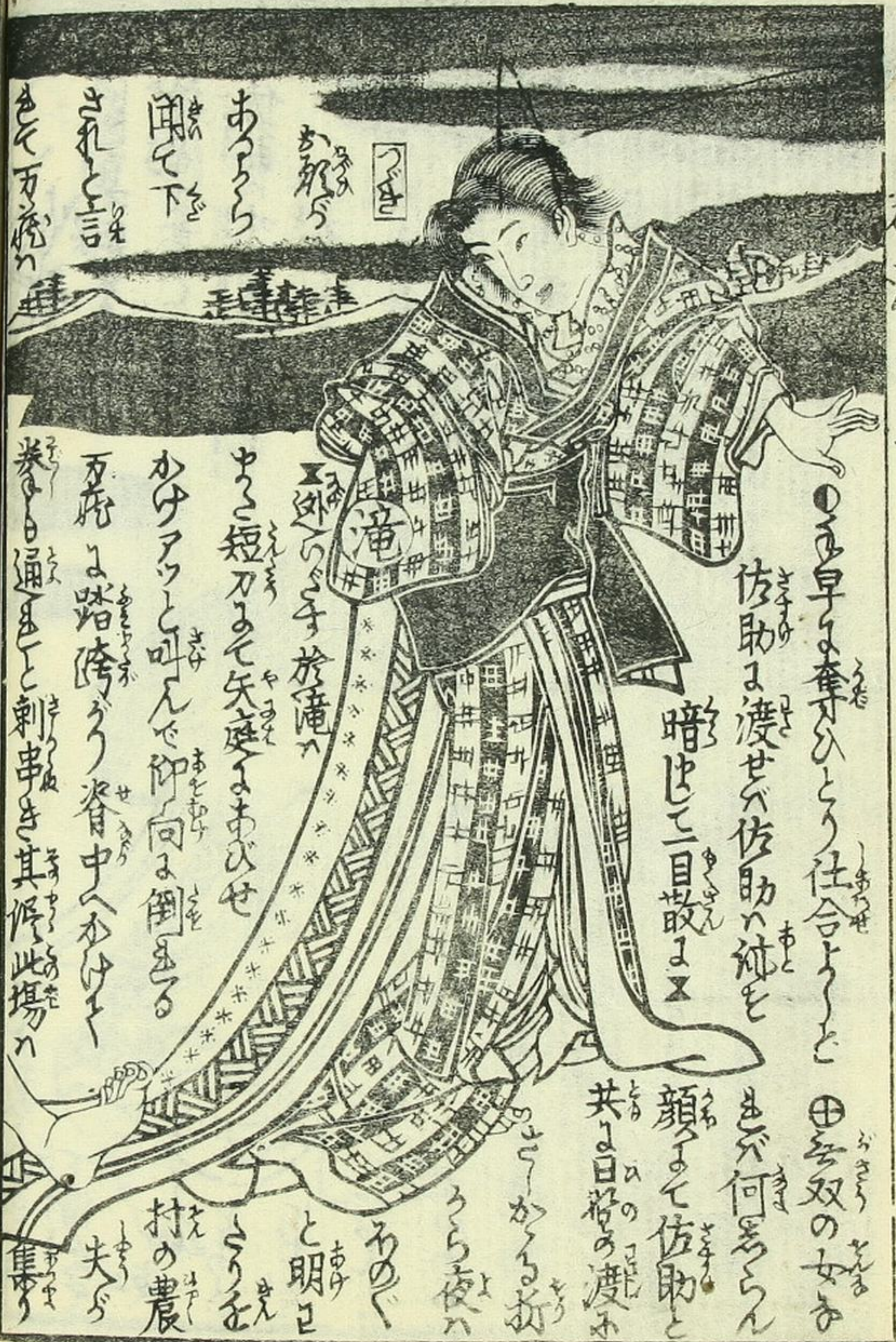
夜に下借をて



顔き振り  
うる其折よ  
於滝の右  
拵る短刀を  
万花の肩先へ  
グサと突つ  
ぬる佐助の  
手懐中の  
幣入を抜んとせぬ  
万花のこゝろ夫婦の泣血戒  
ありと声を振るそもがた立ち  
於滝の疾くもたを伸し被布を

迎きし佐助の四五丁先へ紐け  
ぬけ標へあつし併り  
むひて  
あつし  
於滝の強  
悪

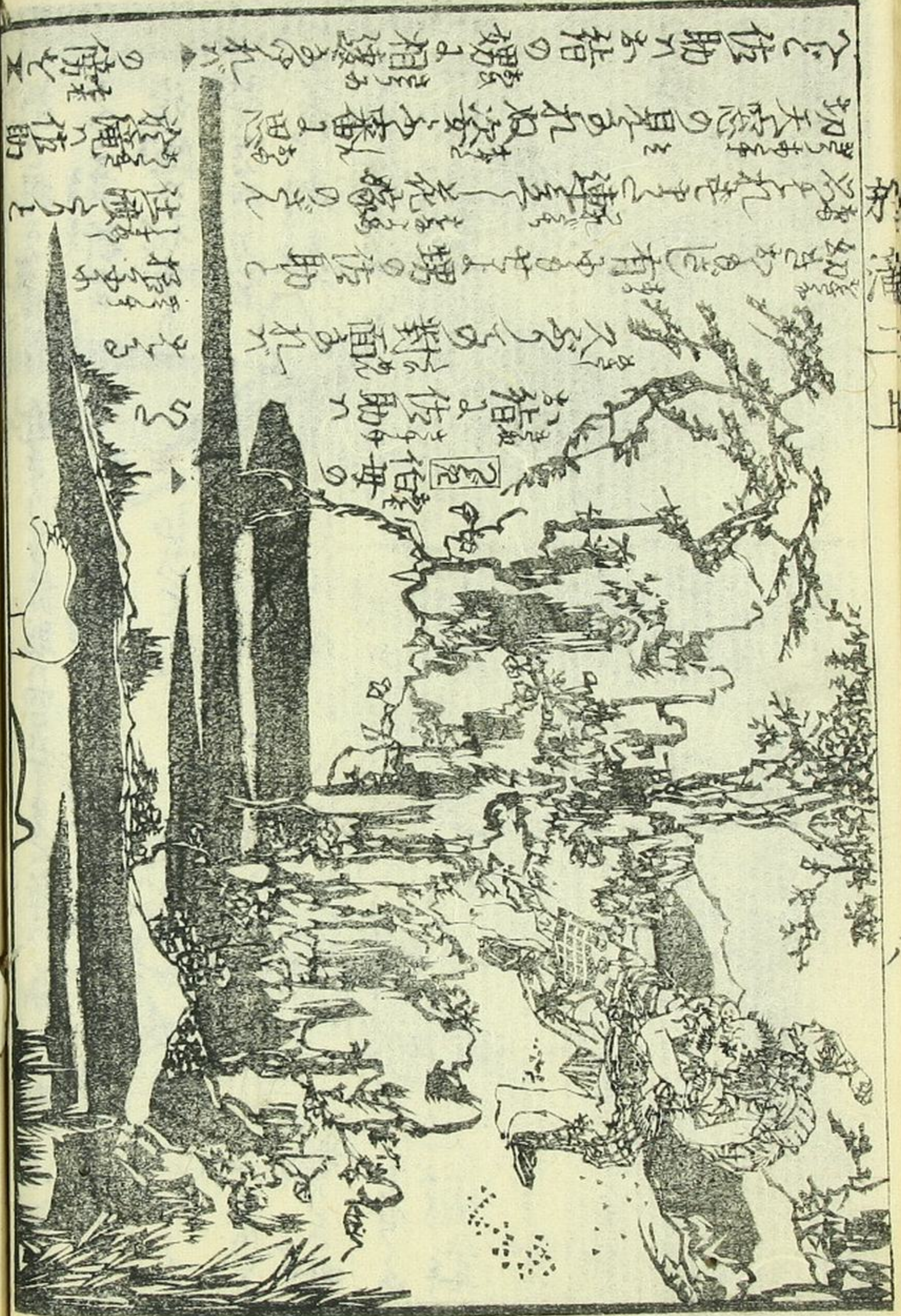
熊  
熊の  
原ま  
人殺し  
あつしと  
頻る小吐  
をせし  
二個の耳  
ゆゆ止め  
来り機屋文を  
あて



あつし  
聞て下  
されと言  
色万花の  
つぎ

早ら奪ひとり仕合よと  
田舎の女  
佐助は渡せば佐助の袖も  
暗ばて目散よ  
短刀よて矢庭よあひせ  
かやアツと叫んで仰向に倒るる  
万花は踏踏ぐり脊中へかき  
巻も通して刺串き其修此場の

あつし  
と明日  
村の農  
夫  
あつし  
うら夜  
共白粉を渡す  
顔して佐助と  
も何ぞらん  
あつし



心は佐助に去る結の甥は相違ふべし

切天窓の身は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思



心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

心は丸い娘は次女を審み思

此の如く申す御縁を身は余り何うも恥と申し申すこと空  
 と小誠と申すをいと慕はれ二人の前を物後流るる佐助の婦  
 るもい支る夫夫婦の可愛もいひ佐助夫婦を頼るものやうなる  
 えん計のけ於庵が御切あつて虚といふやうに佐助の於庵の大徳を  
 日野の原より見究めたまふことこゝに罪もあつて文を流るる佐助も  
 殊に於庵の色香は迷ひ於庵が病を癒ししをいつたゆそつて者  
 護はし二十日此の病と打師老慕る甲州無籍の長吉小吉を  
 たい念ひ起し月夜にまきれを身廻山と目當りて甲  
 府の中へ急ぎけり途中於庵の心づいた若や佐助を追ひきたる  
 一大りの間及人赴きし計らふ非人よき甲府のそなを言ひし  
 るひがけり兒晴冷安とて片眼とまひつて於庵が言を聞きし  
 御久しうとて言よりいれが能く是の人力車夫の人吃驚して甲の巻

開化文畧 全冊 西郷一代記 全十四冊

諸證書文例 全冊 徳川戦記 初号二号三号

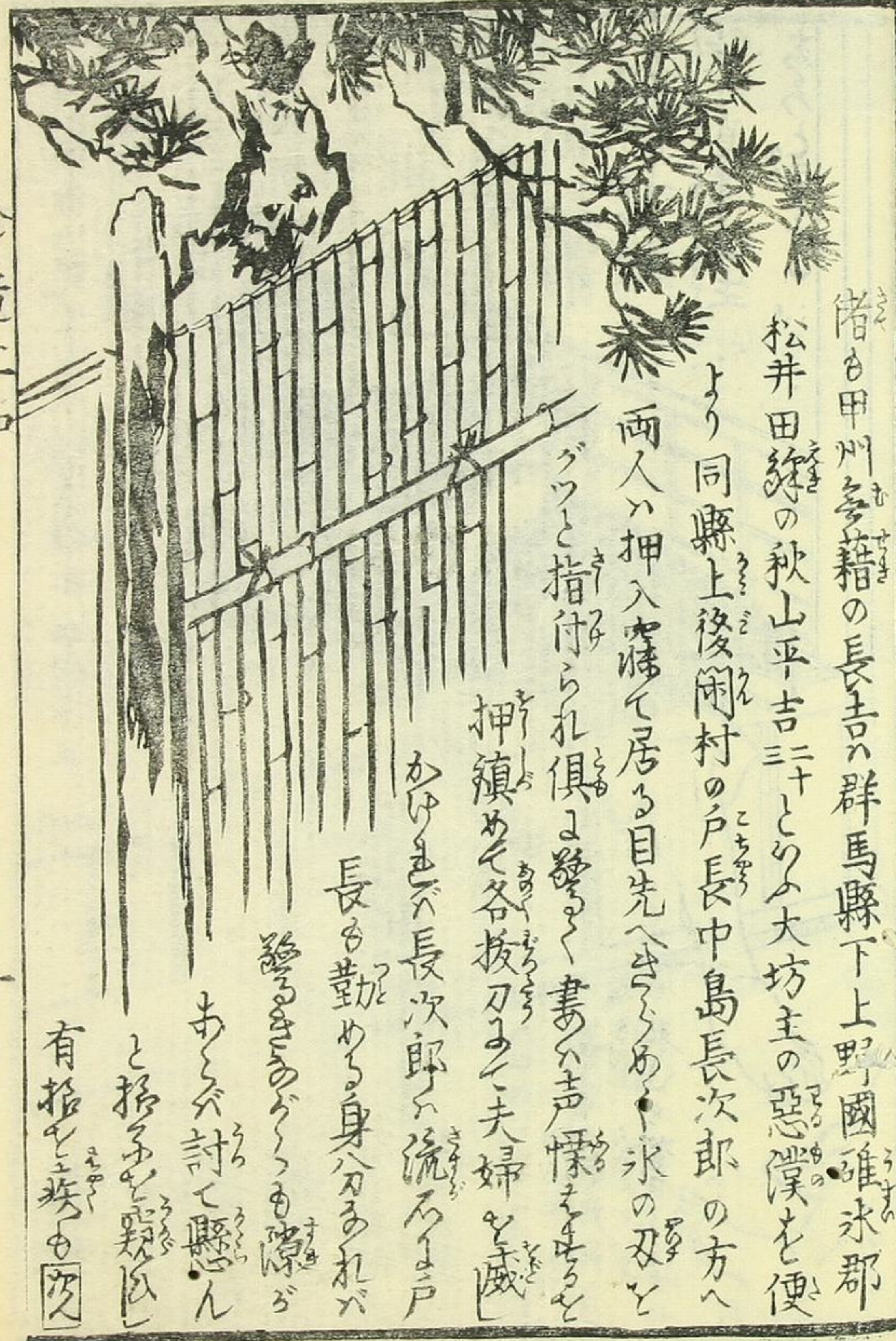
御布告往来 全冊 新聞画解 全四冊

勸農往来 全冊 小学彩色入小本 数冊

諸願届文例 全冊 武者中奉 数冊

用文熟字講釋 全冊 開化往来物 中本品々

散髪開化姿見 全冊 地本問屋 馬食町四丁目八番地  
 追々出版 錦繪問屋 木屋小林宗次郎版



諸も甲州多籍の長吉の群馬縣下上野國碓氷郡

松井田終の秋山平吉三十一の坊主の悪僕を便

より同縣上後閑村の戸長中島長次郎の方へ

兩人の押入を味て居る目先へさくらめり氷の刃と

グツと指付けられ俱に騒々しく書かす声懐をまを

押鎮め各抜刀して夫婦を滅

かひなき長次郎の流る戸

長も勤める身分あれば

騒々しくも

あつて討て懸ん

と招きを疑ひ

有格を疾も





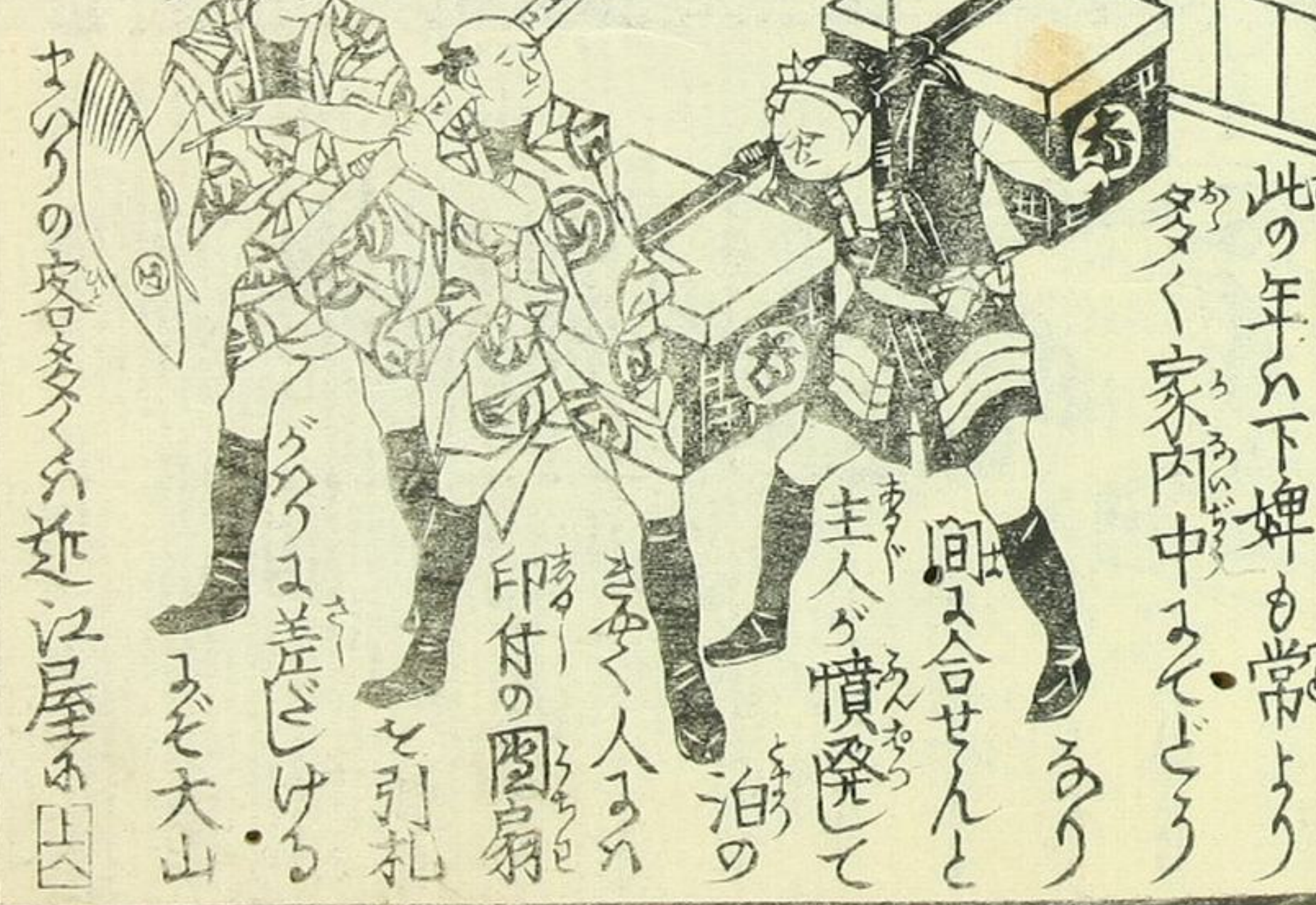
夫と目くらをせ  
 まれが大坊主平吉ら  
 立かると  
 戸長の長次  
 郎を斬つてふ声さのびとウと  
 倒せる其音に  
 阿夫利  
 神社の  
 初月  
 初旬  
 新曆  
 あれは  
 平吉



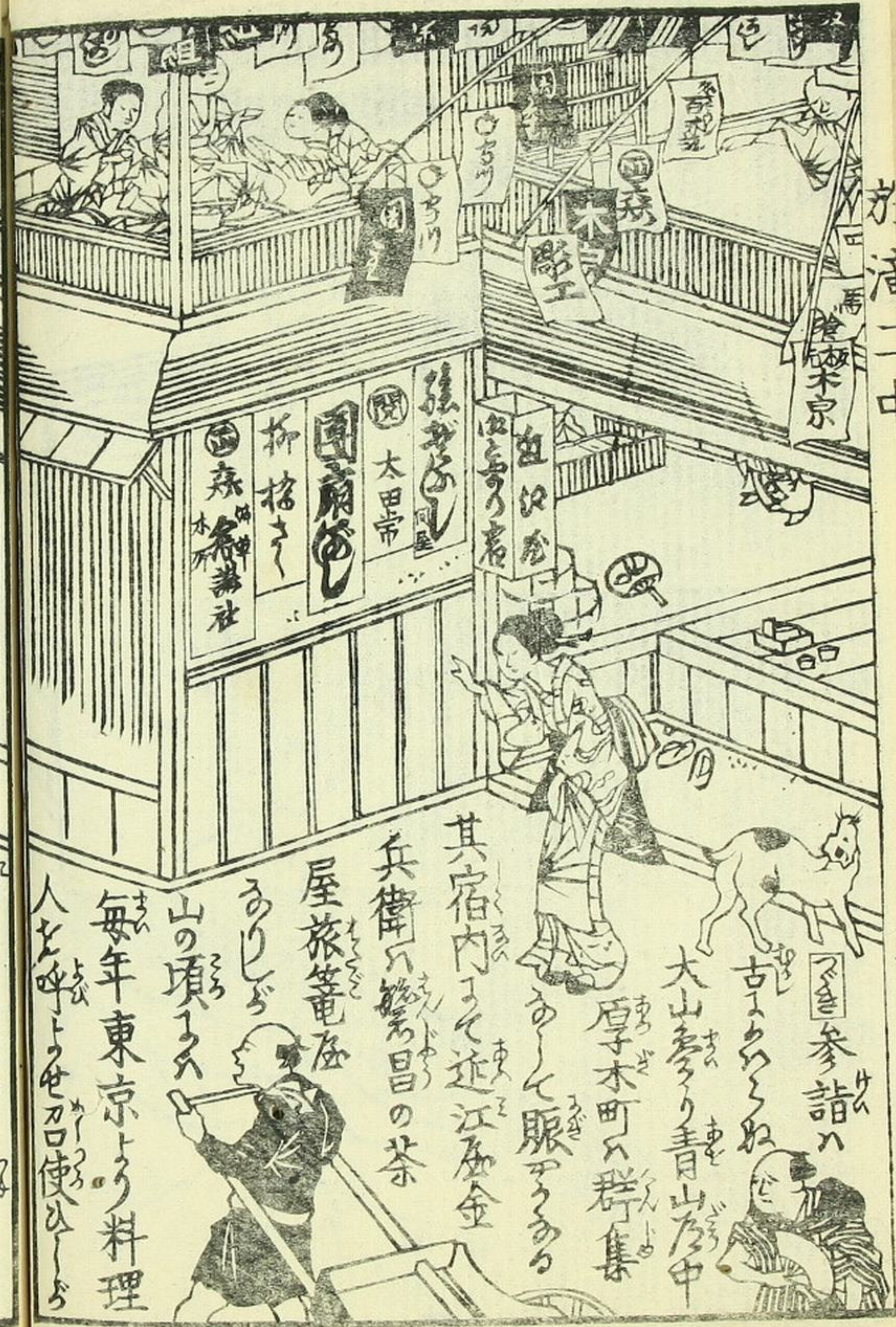
長吉の見てとり  
 椽端のの水俸より  
 金子の  
 四十余  
 の金を  
 奪ひ群  
 馬騾下  
 まで長吉平  
 吉の二個の  
 訳をつけその後  
 長吉の相州阿夫  
 利山の林鹿子安の  
 飲で直様往生  
 ありと云々



下より 定めぬ  
 彼長吉の子安の 町  
 街よりいざこれ方引いざこれと  
 手當り次第の荒稼ぎとほ  
 終い厚木の町より近江屋金  
 兵衛の方へ止宿せしその夜俄く小  
 長吉が身体は発熱し吐瀉もさげま  
 苦しき下婢の強ぎ立寄宿の  
 医師と診察とをいし 所その医者  
 のつらめ必りき雀乱るればつぎ



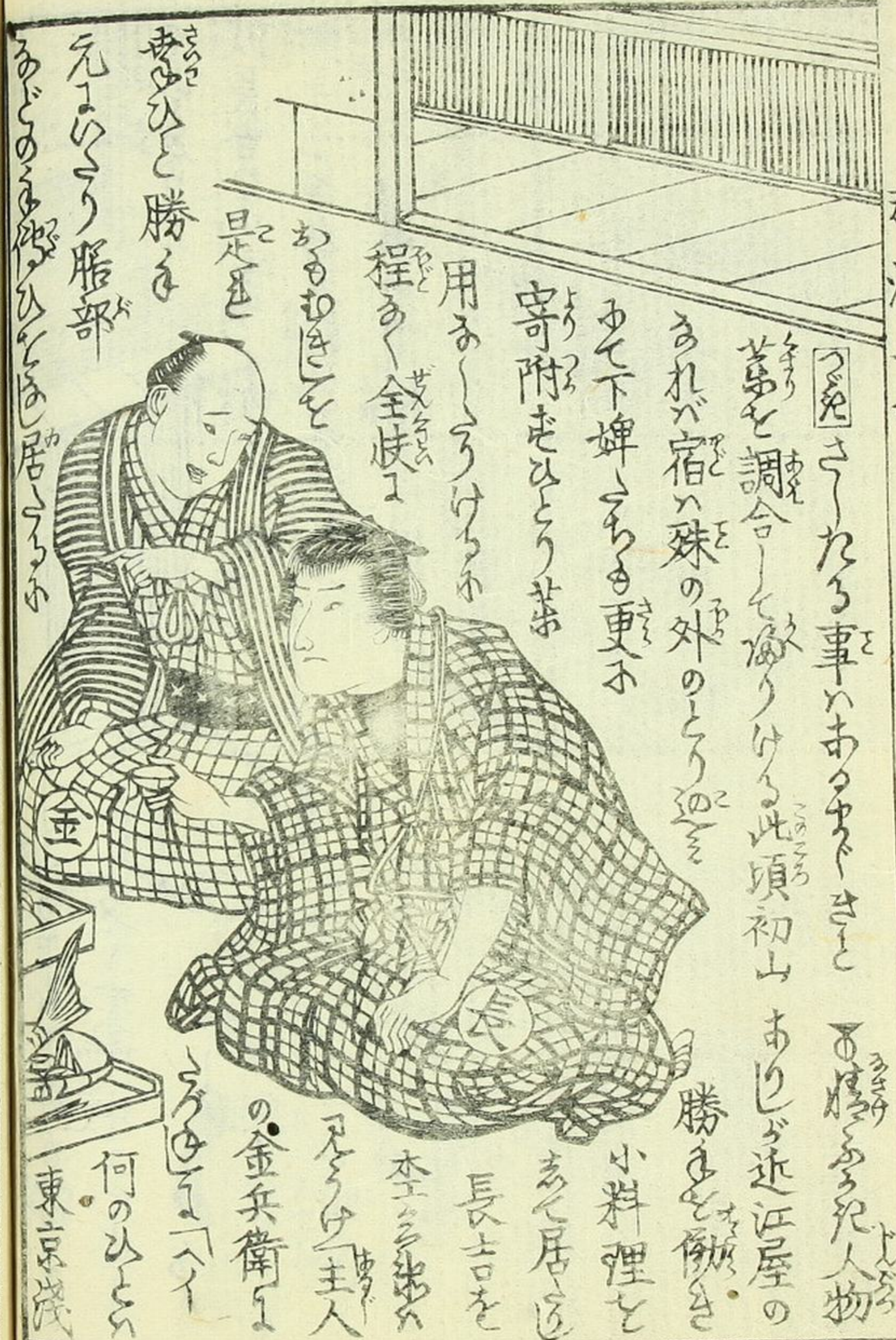
此の年の下婢も常より  
 多く家内中よりとら  
 向い合せんと  
 主人が憤発して  
 泊の  
 さかしく人よの  
 印付の團扇  
 を引れ  
 ぐらうは差どけり  
 みぞ大山  
 せりの客多き近江屋の田



其宿内より近江屋金  
 兵衛の徳昌の茶  
 屋旅籠を  
 ありし  
 山の頂より  
 毎年東京より料理  
 人を呼よせ召使ひら

近江屋  
 厚木町

参詣



此の長吉の料理も出づるも多客の  
 建てる時めは身あどをさう作り  
 一寸と小気のゆがうゆがう主人金兵衛の  
 珠のわらふ気よりの下婢  
 あどゆらあどゆらうと宅中さ  
 長さんくんと呼ぶあれと  
 茲は厚木の田舎  
 此の小其家家ゆて  
 酒造をさうな又做し  
 東京小田原その他諸  
 方へ酒のとり引寄る家族の  
 凡そ三十人余のこぼせし柳田主と  
 用あしうけらふ  
 程あし全枝  
 かもむは  
 是を  
 寄附まひとう茶  
 ちて下婢さちも更ふ  
 勝を傲き  
 小料理を  
 ちて居て  
 長吉を  
 本さし  
 足らけ主人  
 の金兵衛  
 ちてハ  
 何のひと  
 東京淺



此の長吉の料理も出づるも多客の  
 建てる時めは身あどをさう作り  
 一寸と小気のゆがうゆがう主人金兵衛の  
 珠のわらふ気よりの下婢  
 あどゆらあどゆらうと宅中さ  
 長さんくんと呼ぶあれと  
 茲は厚木の田舎  
 此の小其家家ゆて  
 酒造をさうな又做し  
 東京小田原その他諸  
 方へ酒のとり引寄る家族の  
 凡そ三十人余のこぼせし柳田主と  
 用あしうけらふ  
 程あし全枝  
 かもむは  
 是を  
 寄附まひとう茶  
 ちて下婢さちも更ふ  
 勝を傲き  
 小料理を  
 ちて居て  
 長吉を  
 本さし  
 足らけ主人  
 の金兵衛  
 ちてハ  
 何のひと  
 東京淺

柳田主と

四

於津三州

入費の立替や  
使の参りゆ召  
使みーとらあて



李兵

翌朝金を運を  
柳田へ伝

明治十年  
の春  
酒造  
家のあん  
酒積出  
ひそひそ  
東京よ  
一月初  
のそと  
ひか



ちるふ前の宅の目取よそろ  
ふせぬいもあり 拙者の  
とていふも不足  
あふん貸し  
くすのらあ  
一寸の心  
ろと言ふも  
長吉と  
面金も  
こまごま  
る言つて  
世のひ

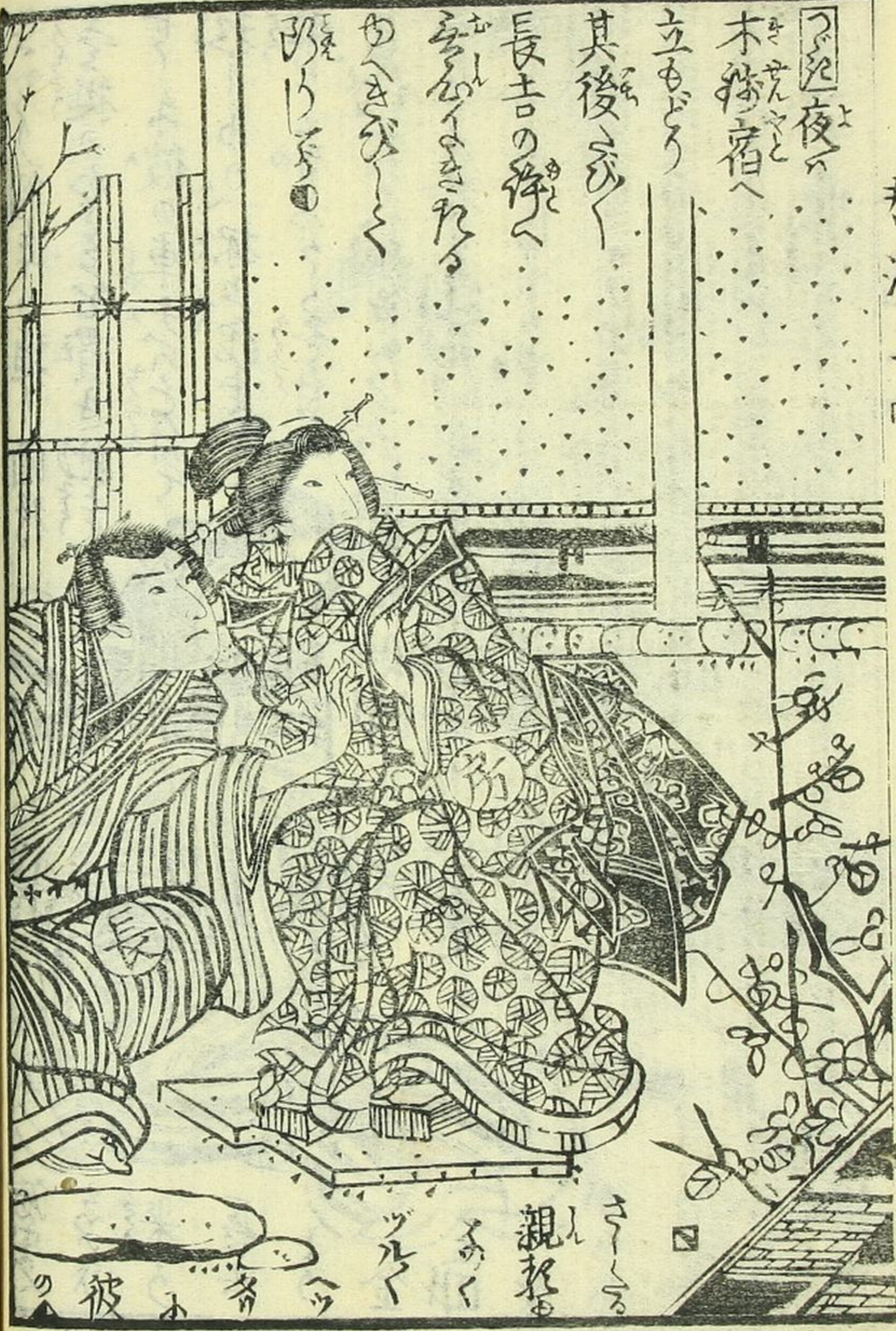
大膽の敵の長生口あれ  
主人オエエ漆の拭  
終りの  
天の  
川端  
三十人  
川を  
吉を  
善の

龍二

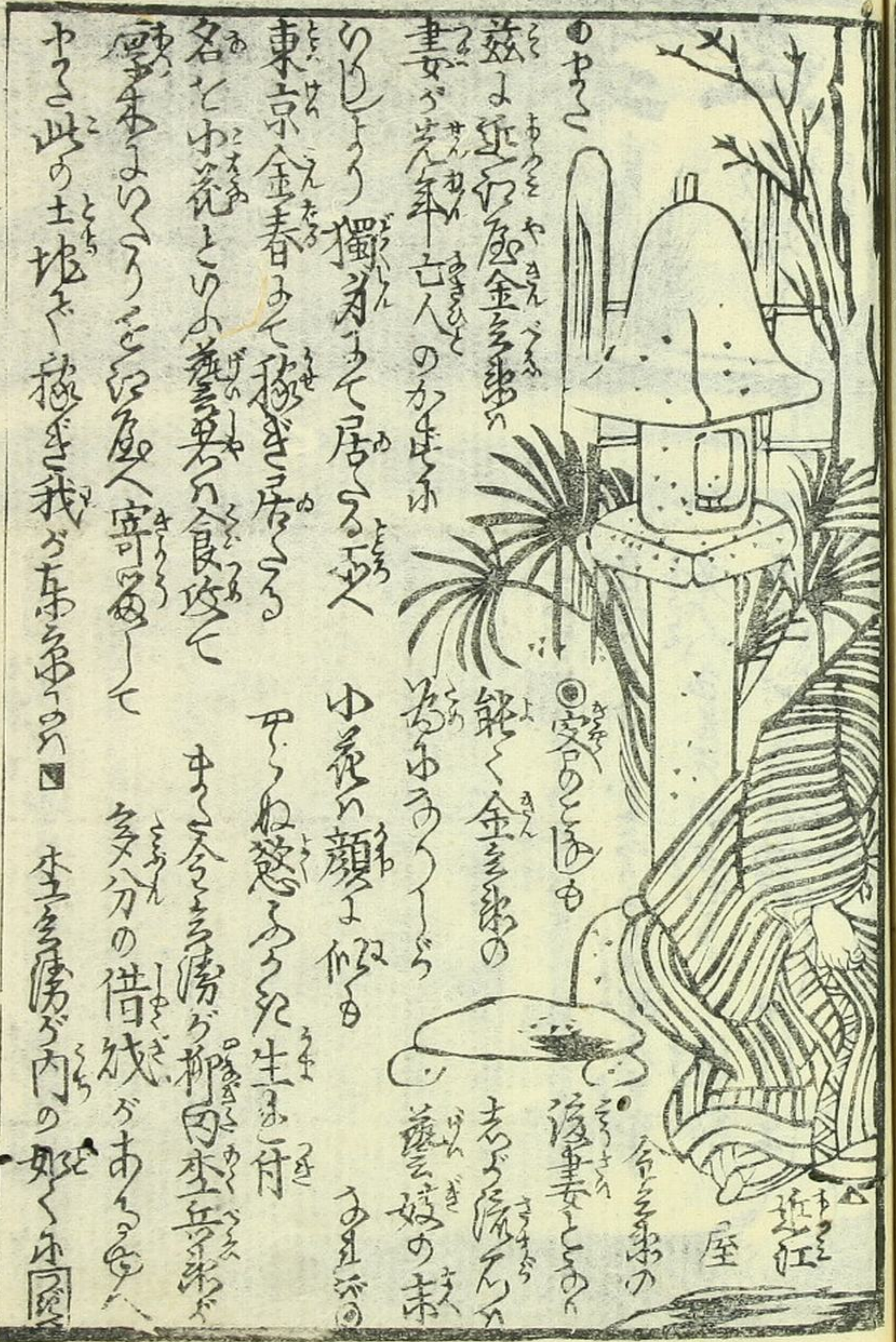
五



つた夜  
木陰宿へ  
立ちどろ  
其後  
長吉の侍へ  
ふんふん  
あふふふ  
あふふふ



親  
の彼  
ツル  
ふく  
さう  
さう



○やま  
茲よ近  
妻が先年  
のりし  
東京金  
名と小  
屋  
○愛  
能く金  
為ふあ  
小花の  
アッね  
中  
多分の  
本  
屋  
屋  
後妻  
志が  
藤子  
あま



柳田  
 妻  
 夫  
 の妻  
 夫

共  
 田  
 折  
 庚  
 細  
 君  
 房  
 夜

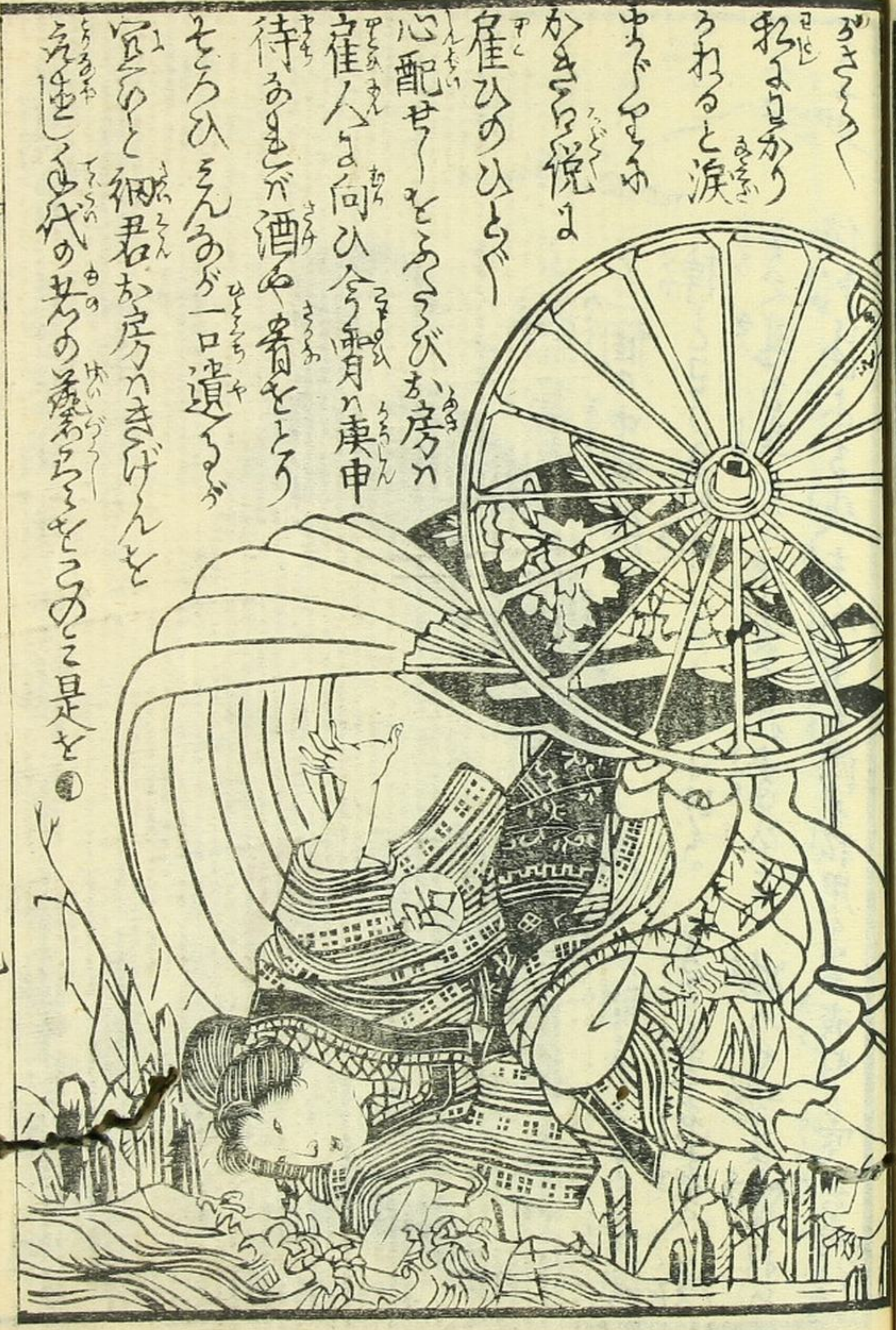


近  
 酒  
 奥  
 下  
 度  
 醉  
 美  
 縁  
 夫  
 身  
 自  
 老

二  
 口

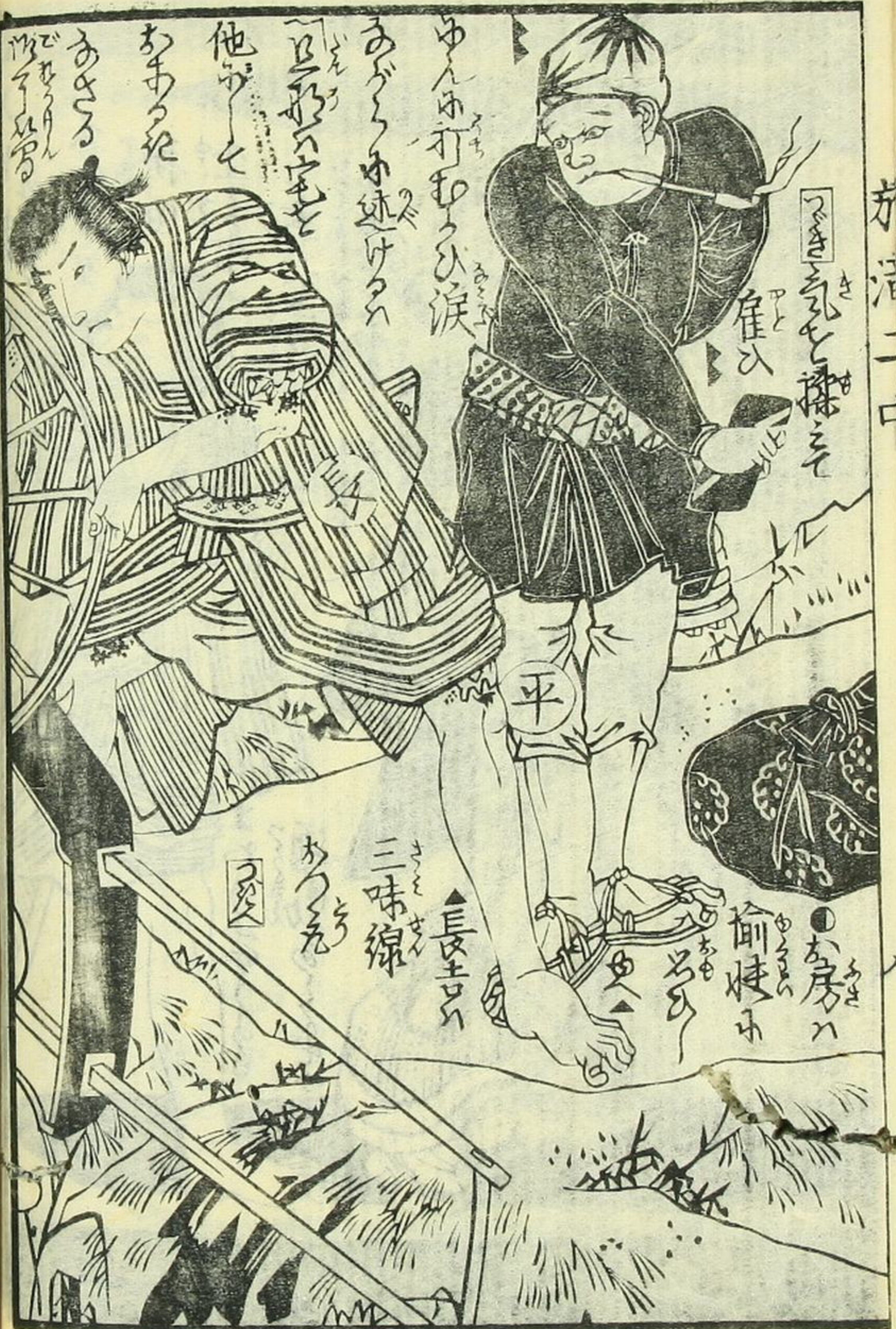
舟

舟



心配せしをあるびお房の  
 雀人よ向ひ今宵月庚申  
 待あまが酒や香をとろ  
 そろひえんあが一口遺るも  
 宜ゆと細君お房なきげんと  
 えはせしお代の其の流るるをこのこ是と

九  
 龍二一



中んゆ打むらひ涙  
 あがらうゆ述げん  
 他がく  
 おあつた  
 あさる  
 雀人よ向ひ今宵月庚申

長まき  
 三味線  
 おつた  
 平  
 榎焼  
 油  
 平

九  
 龍二一

阿彌開化姿見	散髮開化姿見	用文熟字講釋	諸願届文例	勸農往來	御布告往來	諸證書文例	開化文畧
初篇ヨリ 追々出版	地本 錦繪問屋 馬喰町四百十番地 木屋小本林宗次郎版	全一冊	全一冊	全一冊 大日本國名号入	全一冊	全一冊	全一冊
		開化往來物	武者中奉	昔々	新聞画解	徳川戦記	西郷一代記
		中本品々	品々	小学彩色入小本 昔々	全四冊	初号二号三号	全十四冊

心約の  
 初き初  
 合  
 縁  
 の糸  
 比め  
 上  
 の

眼のあちらんのり  
 色  
 早晩  
 房の  
 忍び  
 長吉  
 房は  
 空涙  
 袖  
 貴  
 眼  
 東  
 母  
 依





申の巻のつぎにお房のしるし

引まんふゆまみ

かぶりの

●世間

向の長き

おんあまのあんで俄に帳を

そひの定めを鳥羽の身

おとん板ののりあつた

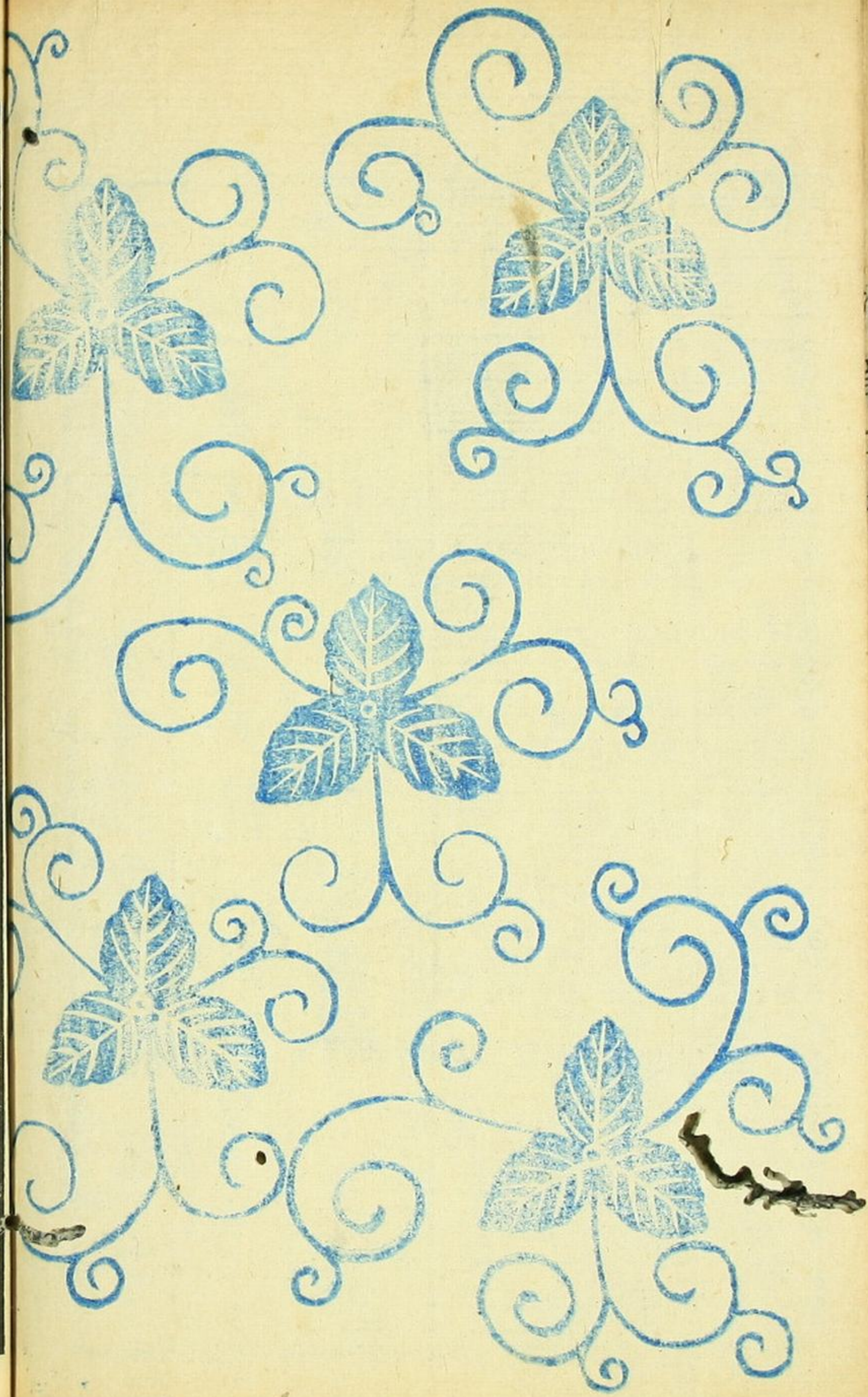
まゝに長き

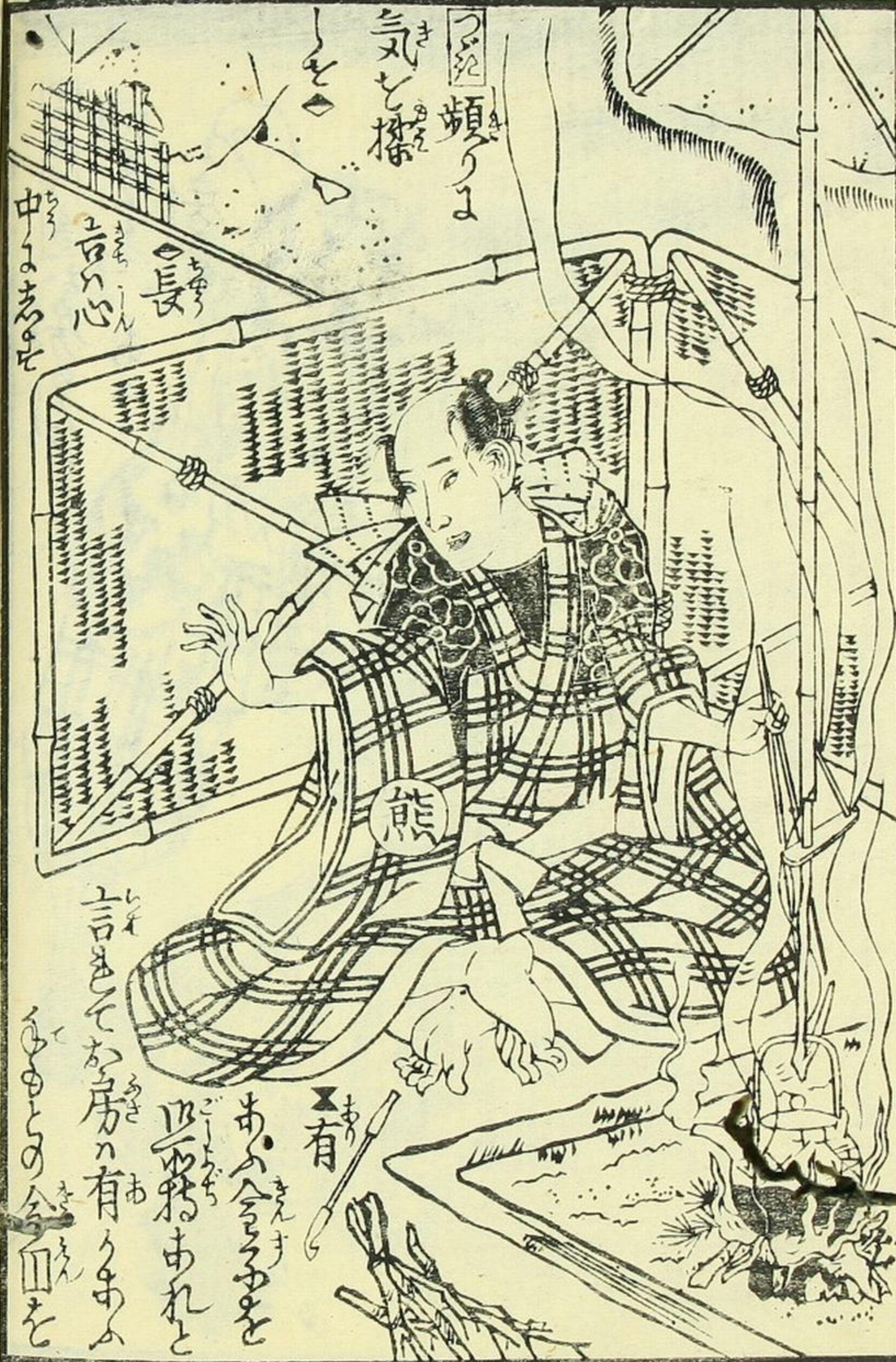
松が

娘の

おあつろニツツの

素あつんと





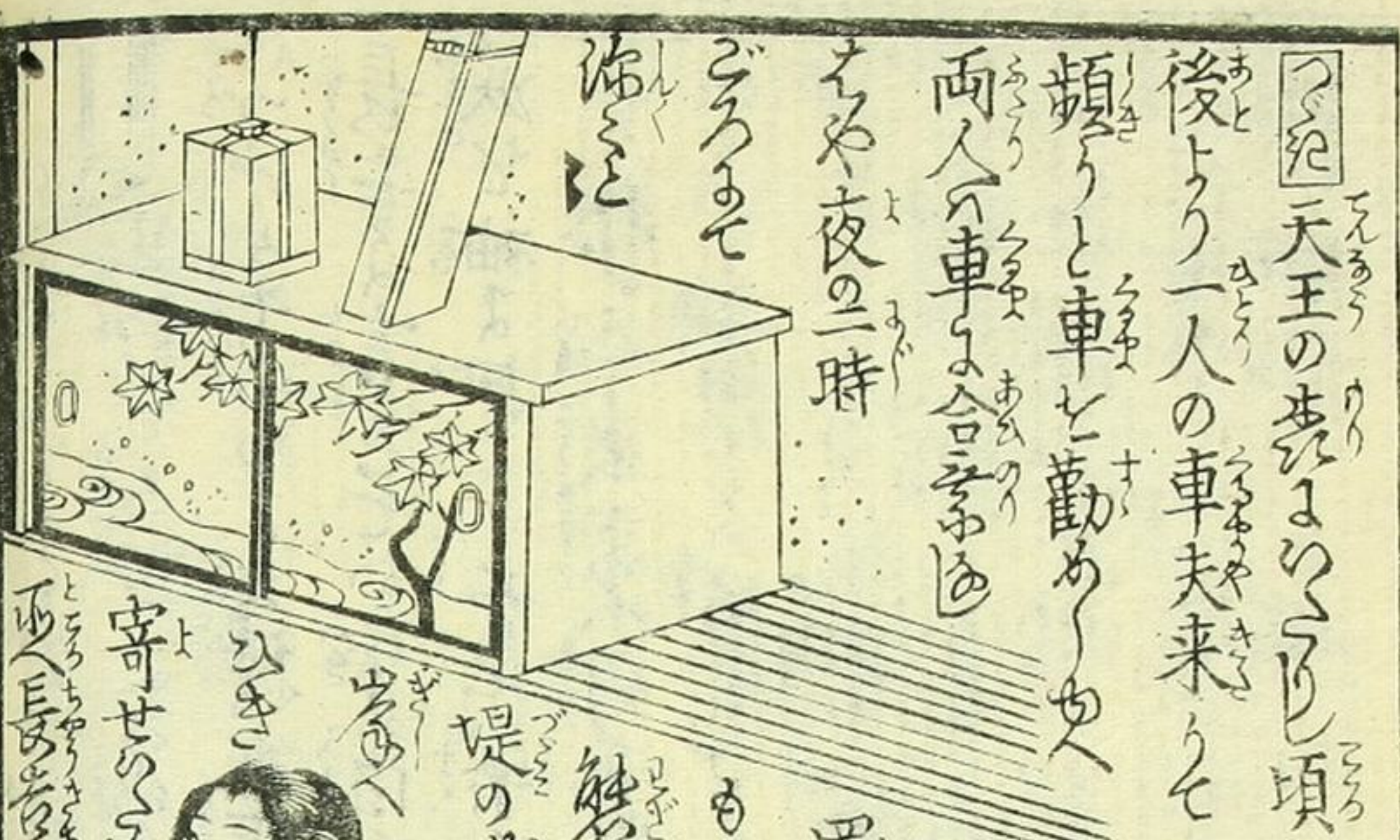
つら頻うよ  
氣と襟

長  
心  
中よま

言きてお房の有るあふ  
あふ合々あふ  
お房有れと  
有  
あふの金口を

中つうとあふ涙せうあふ  
 心つげらわあくと大擔る敵の  
 長吉よ言まてお房の泣出  
 涙を袖に押し止めおあふれど  
 ろう控て今東京入りまらるも  
 さうく無理とあふをひと訣る私の  
 身のつらさあふをわらふと  
 彼の長吉はあふをわらふと  
 出まを長吉はあふをわらふと  
 控てあふをわらふと  
 控てあふをわらふと  
 控てあふをわらふと

かきあふあ  
 元七四百  
 七十田と  
 なるあ  
 五つを  
 長吉が  
 脊  
 とみ  
 柳田  
 の宅を  
 控てあふを  
 控てあふを



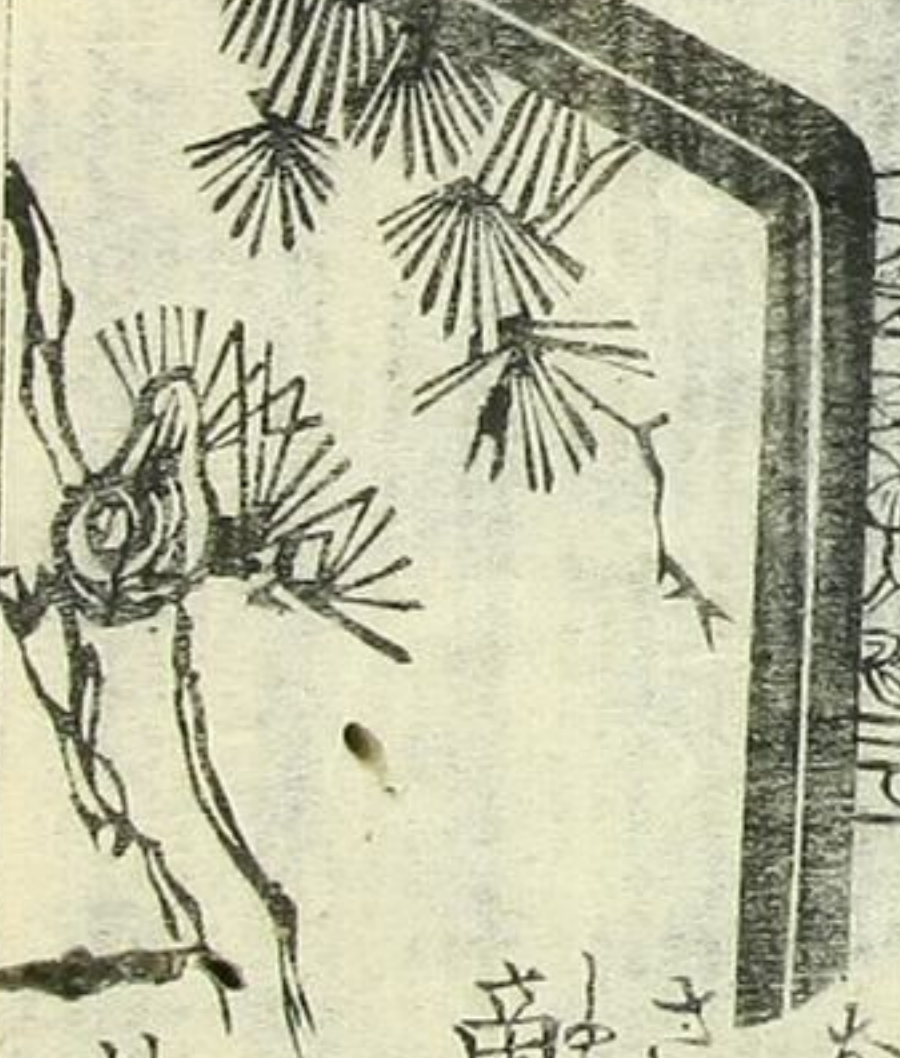
つた天王的の表よりり頃  
後より一人の車夫来りて  
頻りと車と勧めりて  
兩人の車よ合ふ  
そめ夜の二時  
ごころを  
流しと

四切きび〜お房の  
長吉よまきりつはしを  
長吉のいふ水よと車を  
下り怖ぐるお房を車よ  
置きお車夫へいさる  
もの秋山平吉あれが  
船と水除  
堤の川  
ひき  
寄せのし  
西長吉の  
より百象余の金と平吉よの  
もろともお房を  
投げこも二人の  
疾くもは堤を一  
目散もそ途ゆき  
〜其後茶根の  
堤の海よりり長吉



金四六  
己が西拵  
は本房が  
待てやうつる  
車の後よ△  
四百七十  
廻るが早く  
目散よ

長吉の東京へ越きや〜その横  
七中よ来り改名を海  
まの流す〜ゆび〜既よ  
元町二丁目甲州屋のいふ  
暖簾をのび各所商館の  
〜お房を〜そ廣は宰  
ををいせが  
あひ〜  
さ〜んよ  
商法を  
ける渡

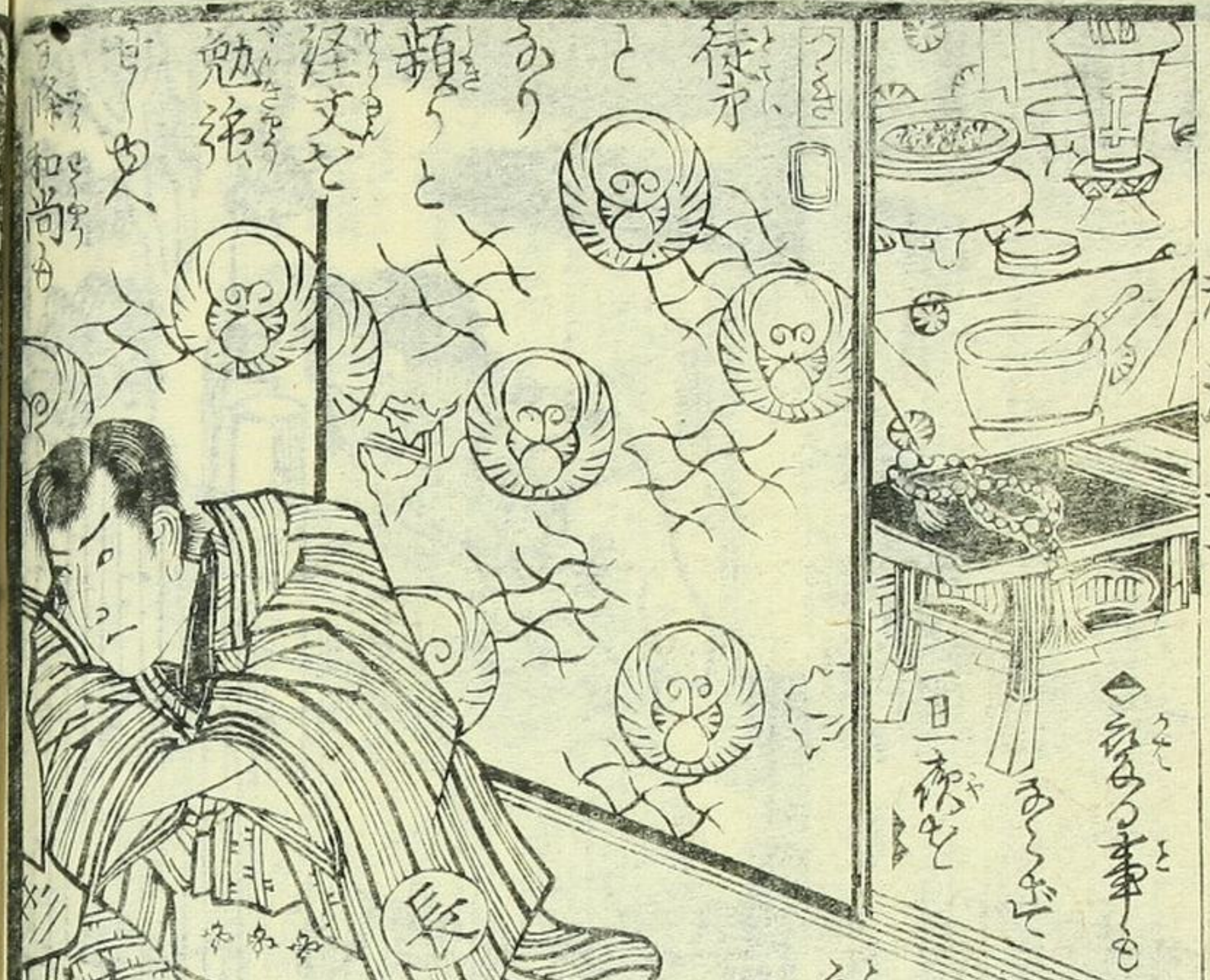






佛の心を  
 解倫  
 終の階の  
 約をのせり  
 ちの捕人  
 買渡の住  
 あるツの菴空  
 市れは是由ひ  
 尾伝織  
 もの伝次女  
 りん

買渡の住  
 返るせ  
 五の蒲萄の盛  
 密夫長吉  
 人あゆ  
 又延山の林鹿  
 立寄  
 旧悪と人  
 是招ゆと馬買  
 の法  
 我を  
 別を田中  
 心を伺ひ  
 宗の終て  
 伝方も  
 あり  
 次弟の旧  
 密夫長吉  
 人あゆ

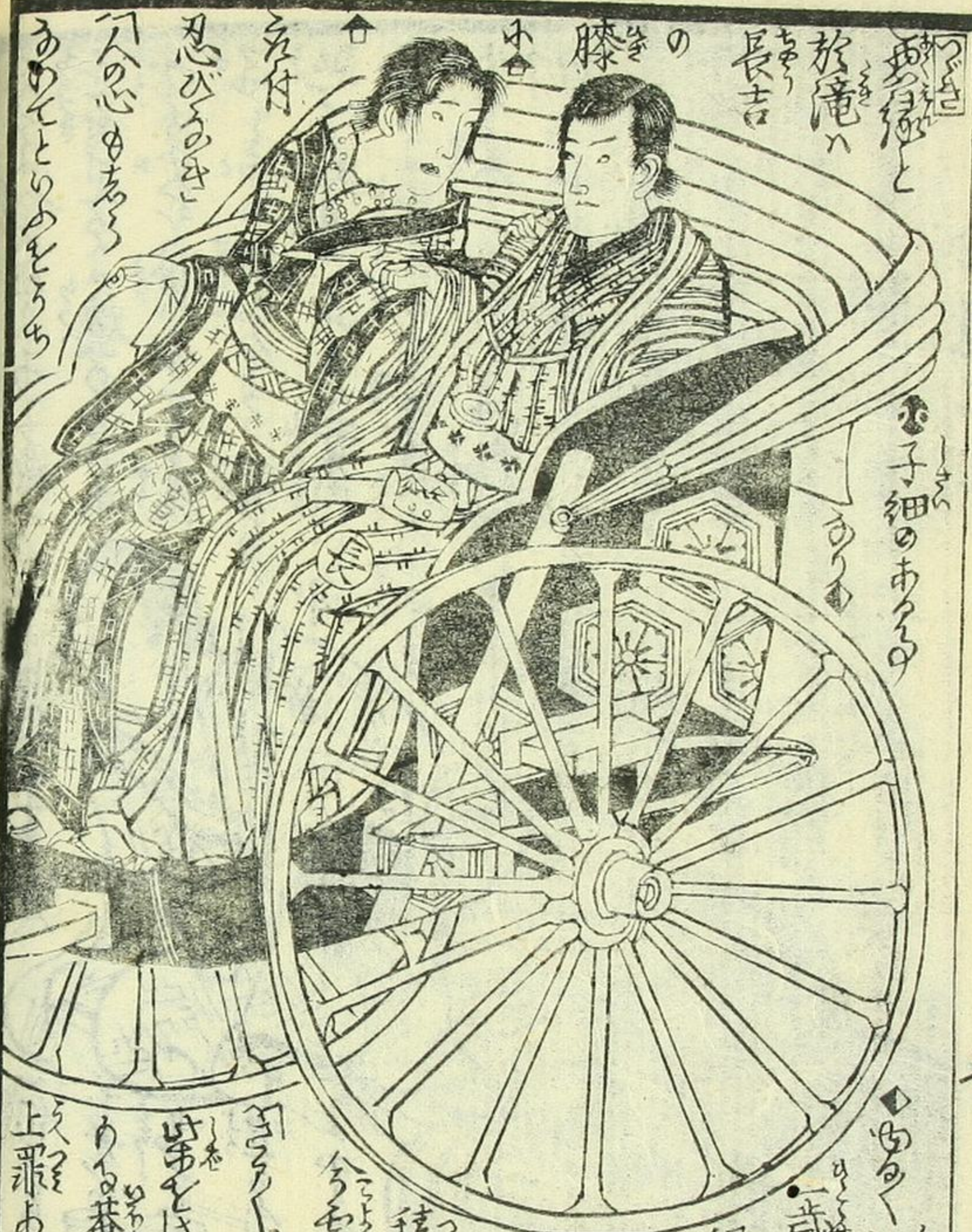


徒に送り  
 密夫長吉  
 秋の次弟  
 甲亥  
 牙を探  
 きてる吉日  
 来る母

密夫長吉

秋の次弟





長吉  
 膝の  
 忍びの心  
 人の心もあつ  
 めてとりのめらふ

子細のあらう  
 悔をば遠く  
 松の山  
 肉へ互ひ  
 折屋風の  
 上罪ある体

滑す長吉の  
 遠きを目  
 振舞ふ  
 有頂天  
 下谷五條  
 罪あつて  
 今ト様



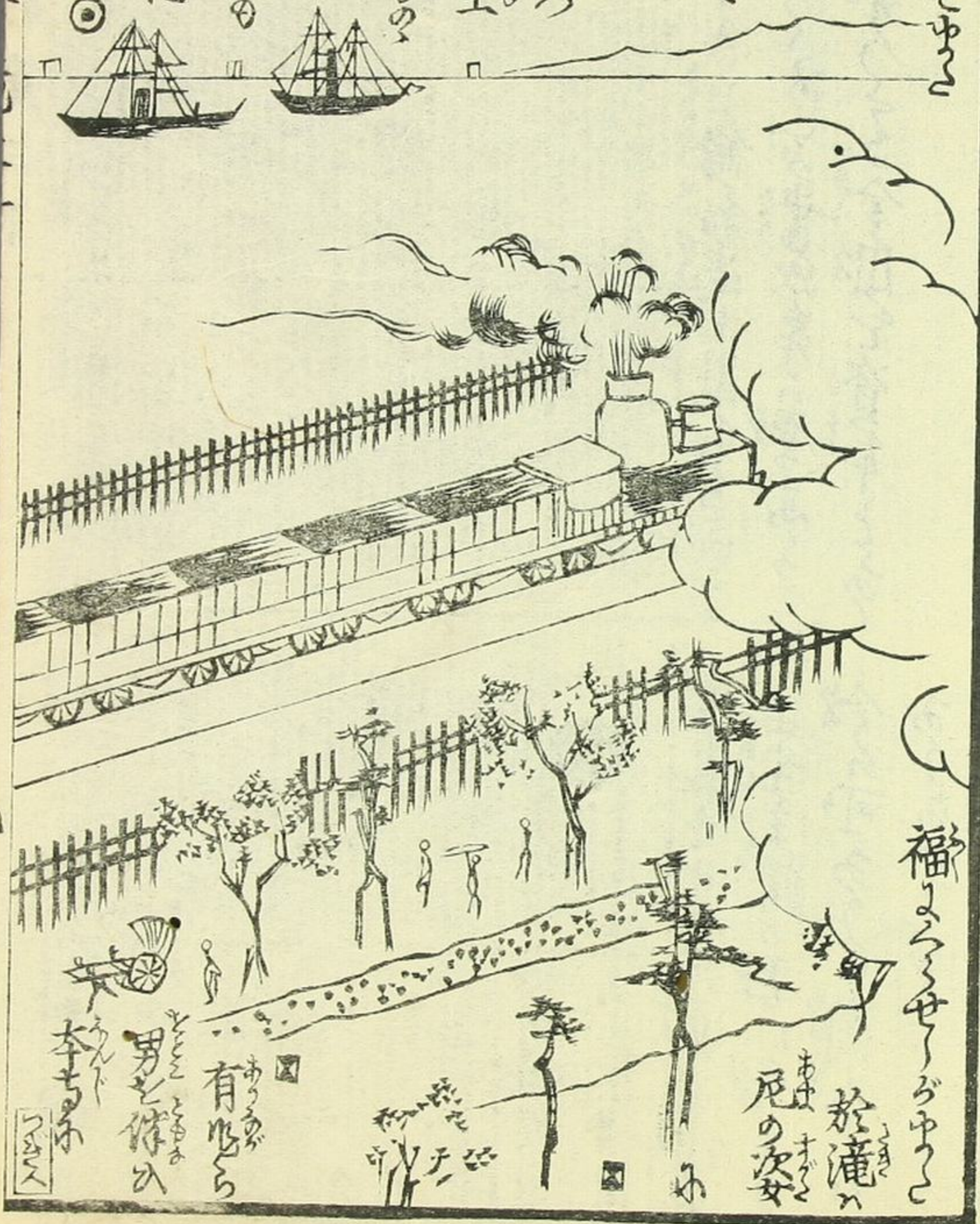
海業の雨  
 長吉の心  
 男の傍  
 海業の雨  
 長吉の心  
 男の傍  
 海業の雨  
 長吉の心  
 男の傍

八  
 二  
 一

七

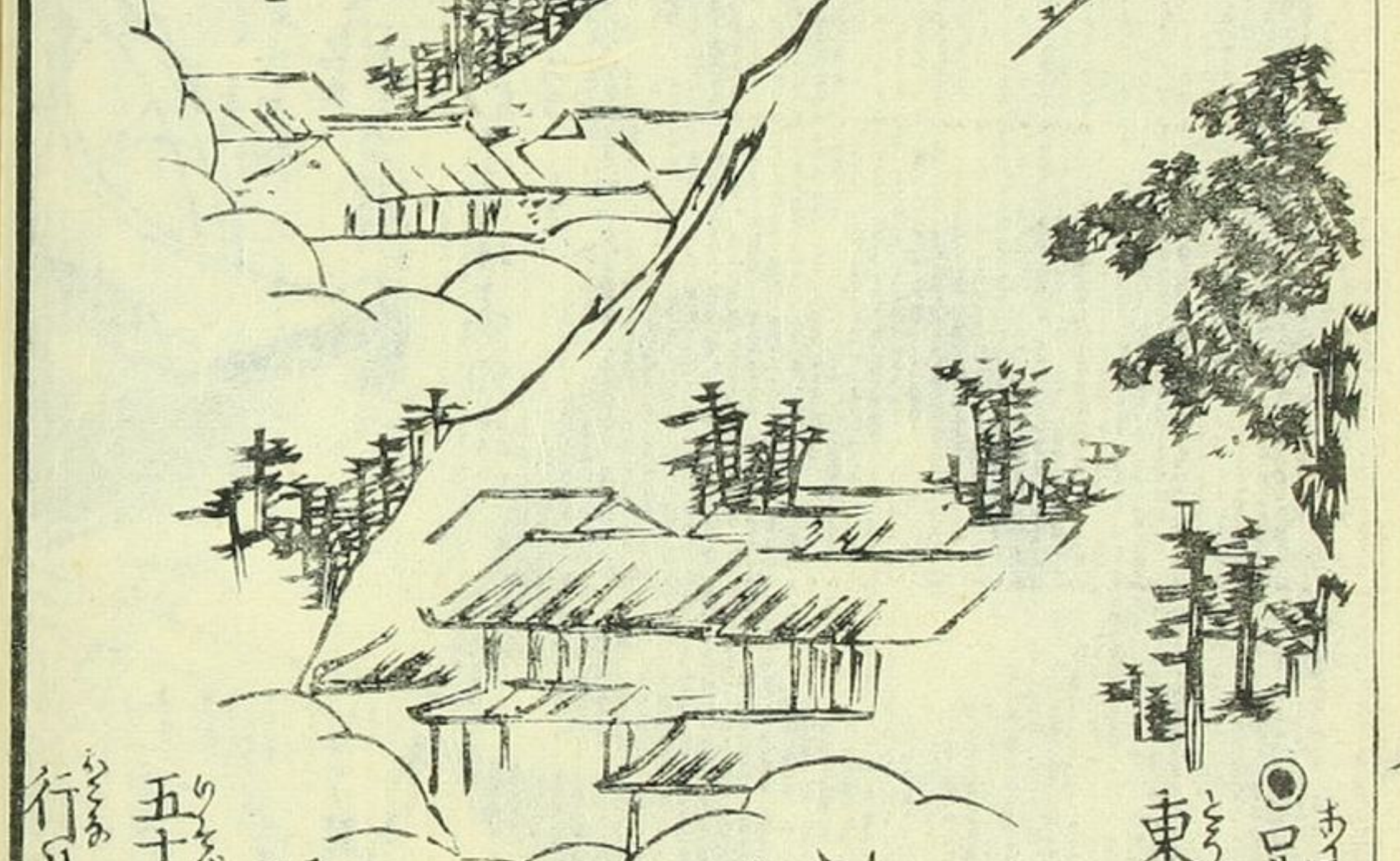


於滝の  
 ひくまびり  
 姿を換へ  
 墨守深の  
 衣よめあつ  
 とし菴主  
 とひのしめい  
 るんのみの  
 大進の  
 さりまの悪  
 漢長吉と



福よらせらぐやう  
 於滝の  
 尼の姿  
 有るら  
 男を伴ひ  
 李長吉

起る食の  
 中の仕  
 度をも  
 色二入  
 何れ拘  
 一物有明の  
 近江八幡の狂言の筋で  
 菴室をゆりゆる  
 彼の長吉の再び此所よ



兄とゆりまきで  
 東谷日條和尚の  
 我が本山あれが  
 二人の菴室を  
 之身延とて  
 ぶける此東  
 谷のちの宿坊  
 みそ人の出入  
 頗る多  
 日條和尚の  
 五十よらせらぐやう  
 行以堅固ま有

つた 到りて日條和尚と面會し長きを兄とりのりし和尙は向ひ  
 口を極へしつるゆゑ今度次第は殊せし母の大病ゆゑいと  
 於庵の居也と尋ねたるに此の甲州へ来りしをうくは西よ尋ね  
 ちて積るは夜と申し今朝山は却き妹の四恩の追を謝し  
 先下度東京表へ出さるさんとのめは和尙の二人よむるに  
 於庵どの母の病氣とあるは是れ余我また次第あり菴の  
 居る村中の考へてうふ後我をよと和尙は恨をつけ母の病氣と  
 偽るるも咽えざる異なき忘るる後も宜あるうか彼の於庵を  
 恩義ある事日條和尚と欺むる志山夫長きをうかや昔酒席と俱は  
 後渡りゆりて母の病氣の厚なるを柳田より清の妻を房より  
 うせひるるる金田を資本とあり今可有りの商人とい  
 ありゆける以下三三んとす

初編 明治十年四月十八日御届

定價二錢五厘

貳編 同 五月三日御届

編輯人 南植町十二番地 齋藤文吉

出版人 馬喰町四丁目十八番地 小林宗次郎

010190508396

